国際シンポジウム ISTS 2011報告

報告　茨城高専 ソン・キョンミン准教授

平成 24 年1月26日（木）から29日（日）までの４日間、国立高専機構とタイ王国のキングモンクット工科大学ラカバン校（以下、「KMITL」＝King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang）が共催する第１回目の国際シンポジウム ISTS（International Symposium on Technology for Sustainability：持続発展のための技術）が微笑みの国（Country of Smile）であるタイ王国の首都バンコク市で開催されました。本シンポジウムは、KMITLの工学棟（大講堂や生協などの福利厚生施設が集まっている）が会場となり、朝早くから多くの学生たちが溢れるにぎやかな場所でした。

▲KMITLの工学棟

KMITLは広大な敷地をもち、バンコク・スワンナプーム国際空港と近い所に位置し、離着陸のために低空飛行する旅客機が工学棟の真上を頻繁に飛んでいました。この時期、日本は氷点下の寒さでしたが、バンコク市は日中平均 30℃の暑さで湿度も 70％以上もあり、非常に蒸し暑くKMITLの校庭は、緑一色できれいな色の花々が満開しており、南国の風景そのものでした。

シンポジウムは、26日の夜にウェルカムパーティーが催され、27 日の開会式と国立高専機構の林理事長の基調講演から始まりました。発表会では、４つの会場に分かれ、27、28日の２日間、招待講演を含め、18分野の 130 件余りの口頭発表が行われました。一般口頭発表は、発表時間10分で、質疑応答が５分になっており、KMITL のタイ側の発表と日本の高専側からの発表順が交互に混ざり、タイ側の発表が終わると日本側で質問し、高専生の質疑応答時間にはKMITL側が質問することが多く見かけられました。KMITLの発表者は主に大学院コースでマスター課程の学生が多く、何人かはドクター課程の学生もみられました。それに対して、高専側は専攻科１年生と２年生が半々でした。英語によるプレゼンテーション能力は両方ともそれほど差はなく、非英語圏の両方にとっては、質疑応答の内容がお互いに充分に伝えることができない場面もあったが、両方とも相手を理解させたい気持ちは充分伝わってきました。

両国における科学技術の差はやや感じたものの、技術の差より若者の元気の差において、高専側がやや劣っているように感じました。特にタイの学生たちは非常に親切で礼儀正しく、積極的に接しようとする。先ず良くお手を合わせて相手にお辞儀をする。大講堂や発表会場などに入る時も、自然に手を合わせて頭を下げるのが習慣になっており、さすが仏教の微笑の国ということを実感いたしました。最後日の29 日は、アユタヤ寺院ツアーに参加し、日本に帰ってきましたが、タイの人々の笑顔が忘れないシンポジウムとなりました。

▲バンケット時のタイ伝統武芸の公演